

火の神と愛宕神社

十五回生 伊藤 發子

千里山会誌の「吹田市佐井寺風土記こぼれ話(二)」に「愛宕山山頂の小祠に祀つてあるのは、日之迦具土神で、往古大であった碓井寺の火を守ると共に住民をも守る大切な神様であり、昔から住民の信仰の対象物体となつていたものである」とある。ここに記されている「日之迦具土神」と「愛宕」とどういふ関連があるのか、考えてみた。そもそも日之迦具土神とは何か。

結論から言えば京都市左京区にある「愛宕山」(標高九一四米、京都市内の最高峰 朝日峯)に、「日之迦具土神」(火伏り鎮火・火難除けの神として)を祀つた愛宕神社が大元になっており、「愛宕山」といふ山の名前と共に日本全国に分社が造られ佐井寺のものも、その一つと考えられる。

愛宕神社の成立については諸説あり、京都府亀岡市にある「愛宕神社本宮」が発祥の地であり天武天皇の御代、分霊が京都府鷹峯に移され、更に現在の愛宕神社に分霊され「阿多古神社」と称したという。また、火伏りの神だけでなく白雲寺とも称して神仏混淆とな

て、人間は初めて他の動物以上のものとなりました。即ちその火のおかげで、人間はすべての動物を征服すべき武器を作り、土地を開拓する道具を作り、また住み家を暖めて寒さをしのぐ方法も知ったのであります。最後に技術や、貨幣製造や、商売や、取引の方法までも彼らが習得したのも、すべてこの火の賜物でありました。このプロメテウスはゼウスに反抗して人類の味方となり、文明と技術を教えた神とされています。その刑罰として、ゼウスは彼をコイカサスの山の岩に鎖でつなぎました。すると禿鷹が来てプロメテウスの肝臓を食いました。けれども肝臓は食われれば食われるあとから新しくまた出来ました。この責苦はプロメテウスがゼウスに服従する気になさなければ、いつでも容易にまぬがれることができるのでした。(中略)けれどもプロメテウスはそれをこぼしました。それで彼は不当な苦しみに対する剛毅忍耐と圧制者に対する意力の象徴となつたと言います。

(以上の引用はブルフィンチ「ギリシャ・ローマ神話」野上弥生子訳 岩波文庫 1978年初版による。)

ギリシャ神話のプロメテウスの話は人口に膾炙している。日本の火の神はどうなっているのか。結論から言うと愛宕の神となっているのである。

り「武装して馬に乗る戦の仏」勝軍地藏」が祀られ光秀や秀吉が戦勝祈願したという。

愛宕山遠景 嵐山から



愛宕神社表参道(清滝から山頂)

日本の神話に最初に登場する夫婦の神はイザナギ、イザナミである。以下「伊耶那岐命・伊耶那美命」(古事記の表記)は片仮名にする。このお二人は協力して国土を生み、さらに神(風、海、山、船など)を生み、最後に火の神を産んだ。どんな神話でも「火」の存在は大きい。

ギリシャ神話では

プロメテウスはアテナの助けを借りて、天に昇つて太陽の二輪車の火を自分の炬火に移し取り、その火を人間の所へ持って下りました。この賜物によつ

火の神の誕生

イザナミは夫イザナギと協力してあらゆるものを産むが、最後に火の神を産む。その神の名は古事記では三通り記されている。

- ①火之夜芸速男神(火の焼ける勢いが速い神)
- ②火之炫毗古神(火の輝く男神。かぐはちらちらと揺れる意)
- ③火之迦具土神(火の暴威。手に負えぬ乱暴者。火災を起こす災厄神。日本書紀では火神軻遇突智神となっている。古代宮廷ではこの神を恐れて、六月と十二月に宮城四方外角において鎮火祭を行った。以下この③の神をヒノカグツチノカミと表記する。この子を産んだために、母イザナミは「美蕃登」を焼かれ、遂に「神遊り坐しき(亡くなられた)」。

亡き妻を求めて

そこでイザナギはイザナミを「出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬った。そして我が子の「首を斬りまじき」。それによって多くの神が生まれたが、妻恋しいイザナギはイザナミに逢うために黄泉国(死者の行く他の世界)へ行く。そこでイザナミに帰ってくれと頼む。

イザナミは「悔しきかな。速くは来まさず(悔しい)。

早く来てくれないのだから)私はもう黄泉の国の食物を食たべてしまったから帰れないのよ。」けれども「那勢命(愛する夫)」が、「来ませること恐おそし」。だから黄泉の神たちと相談します。「我を見莫なしまし(私を見ないで下さい)」といって奥へ還かえっていったところがないか出てこない。しびれを切らしたイザナギは、頭にさしていた櫛くし一本を折り火をつけて見た。イザナミの頭には「大雷」、胸には「火雷」、腹には「黒雷」、陰には「杵雷」、左手には「若雷」、右手には「土雷」、左足には「鳴雷」、右足には「伏雷」、合わせて「八くさの雷」が居た。ぞっとしたイザナギが逃げ帰ろうとした時イザナミは言った。「吾わがに辱は見せし(私に恥をかかせたわね)」。とくやしがり、「予母都志許売(黄泉の国にいる醜い鬼女)」と「八くさの雷神」に命じてイザナギを追わせ、最後は自ら追ってきた。

イザナギは逃げながら、身につけたものを投げ捨てて、そこに生った食物(ぶどう、筍)などを投げ、鬼達がそれを食べている間に、どうにか黄泉との世との境界まで来、その入口近くの坂本になっている桃三ヶを投げ、ようやく彼らを撃退する。かろうじて黄泉比良坂から脱出できたイザナギは「千引の石」で入口を塞ぐ。

豊玉姫は「私の本性を見られたので、海へ帰ります。皇子を育てるために妹の玉依姫をよこします」と言いつて海に帰り、産まれた皇子「鵜草草不合命(当時産屋の屋根は安産を願ねがい鵜の羽根で葺ふいたが、急な出産で間に合わなかったのでこの名が付いたという)は育ての親、叔母である玉依姫を娶よめり、四人の皇子が産まれるがその末っ子が初代の神武天皇である。神話ではないがワグナーの長大オペラ「リング」では英雄ジークフリードが彼の母を助けた叔母のブリュンヒルデと結婚する。

「ご存じ「夕鶴」では機はたおる鶴の姿を見られた「つう」が「与よひよう」の許を去る。

現代の離婚原因「性格の不一致」、「家庭内暴力」に比べ昔の日本人の離婚原因には説得性があるのでは。

ギリシャ神話でも妻を迎えに、

世界共通亡き妻を想う話

イザナギが黄泉の国へ妻を迎えに行く話と同じく、ギリシャ神話「オルフェウスとユーリデーチェ」があり亡き妻を想う心はいつの世でも変わらないものである。アポロンの子、オルフェウスはすごい美男で豎琴

文献に現れた日本最初の離婚
そこでイザナミは「愛いとしい那勢命(いとしいわが夫)よ。今後あなたが生む人草(人間)を一日千人殺します」と言う。それに対してイザナギは「それなら私は一日に千五百人産もう」といつて二人は別れる。この二人の離婚宣言を古事記では「事こと戸を度す」といい日本書紀では「絶妻之誓」と書き「コトド」という訓注がついている(古語辞典では離婚の時に唱える呪文とある)。以後イザナミは「黄泉大神」と言われ、その場所は「出雲国之伊賦夜坂」と言う。これが日本の離婚の最初の記録である。(文中の引用文は岩波日本思想体系『古事記』による。)

夫婦といつても、親しき仲に礼儀あり、人間がいちばん傷つくのは、恥をかかされ、プライドを傷つけられることである。

夫婦別れの話では海幸・山幸の話もよく知られている。兄の海幸の釣り針を失くした弟の山幸が海底の海神の許へ行き、海神の娘の豊玉姫と結ばれる。山幸が地上に戻った後豊玉姫が山幸の許に来て「私はあなたの子を産みますが、私を見ないで」と言つて室(産屋)にこもるが、山幸は心配で我慢できず室の中を見ると、ワニが苦しみのたうっている姿を見てしまう。

の名手、蛇にかまれて死んだ妻のユーリデーチェを追つて冥界(黄泉国)に行き、豎琴で冥界の王プルトの心を動かし、帰る途中で絶対に後ろを振り向かないとの条件で、ユーリデーチェを連れ帰ることを許される。付いてきているか心配したオルフェウスは堪たらずうしろを振り向き、ユーリデーチェは冥界に戻されてしまう。神話ではその後オルフェウスはユーリデーチェのことだけ想い、ディオニソス(バツカス)を敬わず他の女性がいくら気を引こうとしても、全く無視したため、ディオニソスと彼女たちの怒りを買かい、祭りで興奮した女性達に八つ裂きにされ、首と豎琴は河に投げ込まれたと言う。これをテーマにした多くの怖くて美しいロマン派の絵画が今に伝えられている。

モンテヴェルディやグリユックのオペラ「オルフェウスとユーリデーチェ」ではアポロンが彼を天に昇らせたり、愛の女神アモーレの導きで二人が幸せに暮らすハッピーエンドになっている。

「愛宕山」と「火の神」の話がどんどん発展しましたが今回はこれで筆を止め、又の機会に続きをご紹介します。

なお、編集部で元の原稿を一部再構成しております。
(文責 奥田)